

## 戦前のカナダ伝道と日系移民社会 ②

おやさと研究所研究員  
尾上 貴行 Takayuki Onoue

前号で見たように、日本人のカナダへの渡航は19世紀末には活発になったが、厳しい労働条件と過酷な生活環境で生きる人々にとって宗教は不可欠な要素であった。日系移民社会においては日系キリスト教と仏教が様々な面で大きな役割を果たした。

## 日系キリスト教

ブリティッシュコロンビア (BC) 州の日系移民社会で最初に伝道を開始したのはキリスト教であり、1892年にカリフォルニア州のメソジスト派教会の河辺貞吉牧師がバンクーバーで伝道を行ったのが嚆矢とされる。河辺がカンバーランドで行った集会には炭坑で就業していた日本人坑夫ら80余名が参加したとされる。翌1893年にはシアトルに在住していた信徒の岡本益次郎がバンクーバーに移住し伝道を開始。当時スティブストンでは多くの日本人が漁業に従事していたが、風紀の乱れが日系移民社会で問題とされていた。そこで岡本は、主に矯風を目的として教会を設立したが、その後黄熱病や腸チフスが流行したため、病院としての機能も果たすようになった。1896年には専任の伝道者として籙木五郎が、日系移民社会の指導者の一人田中新吉らによって招かれてバンクーバーに赴任し、晩香坡教会が開設した。籙木は英語教育、日本語教育、また邦字新聞発行など様々な活動を展開した。

こうして、日系キリスト教会は、BC州における日系人の移住と発展の状況に呼応して、各地で形成され発展していった。同教会は宗教団体として日系人たちを精神的にサポートしただけでなく、彼らが移住した社会において生き抜いていくために様々な便宜を与えた。それは「まず第一に矯風、啓蒙、同化、つまり移民が一日も早くその国の社会の風俗、習慣になれ、酒、賭博、売春婦などの誘惑に敗けることなく生活できるように導くこと……第二にはスティブストンの漁者団体付属病院に代表されるような医療活動……第三には、新渡航者への英語教育、一世とともに渡航した児童やカナダで生まれた二世に対する幼稚園や小学校の教育、日曜学校や講演会などでの宗教教育」(佐々木、337頁)であった。

## 仏教

カナダでの仏教徒の活動は滋賀県出身の西村初太郎が嚆矢とされ、1901年にニューウエストミンスター近くの製材所で、毎週信徒が集まり法話が行われていた。1904年ごろには、バンクーバーの信徒有志が会合を開き、仏教会設立についての協議が行われ、西本願寺へ開教師派遣の依頼をしている。こうして翌1905年に西本願寺から開教師として佐々木千重が派遣され、最初の仏教会設立を見た。1913年には仏教会婦人会のバンクーバー支部が設立され、発会式には100余名の婦人が参集した。また1920年代に入ると日曜学校が開始され、仏教青年会も設立されるなど、仏教会の活動は多岐にわたって活発になった。日系人が多く居住していたスティブストンでも1908年ごろから信徒が集会を開いており、1928年に仏教会が開立されている。こうして1930年代までにはバンクーバーとその周辺地域に10を超える教会が開立された。

初期の日系移民にとって仏教会は葬式に関わる重要な役割を担い、また日系移民社会において代表的存在として中心的な存在だった。子弟である二世にとっても、宗教活動の施設としてだけ

ではなく、教育、スポーツ、そして社交の場として重要な位置を占めた。また日系移民排斥の動きが激しくなる中で、苦難に立ち向かうための精神的な支えが必要となり、日本人としてのアイデンティティ確認・保持のために日本の伝道宗教としての仏教への欲求が高まったことも、仏教会が発展していった要因であった。

## 金光教

日系移民社会の宗教は日系キリスト教と仏教に二分されるが、少ないながらも金光教や天理教などの新宗教も活動している。天理教については次号以降で述べることとして、ここでは金光教についてみていく。アメリカ本土やハワイで活発な伝道を行っていた金光教は、1920年代後半からバンクーバーやスティブストンに在住していた日系人の間で講社を形成している。その活動の中心となったのは、山田浅太郎と森下梅蔵であった。

シアトルで入信した山田はバンクーバーに移住し、漁業で生計を立てていた。1931年にバンクーバー市内のキーファ街で布教拠点を設置した。しかし翌年、諸事情により山田が滞在できなくなるとそののちは、シアトルの布教師が出張布教を継続し、山田が設置した布教拠点をもとに1936年にカナダ公認の金光教会として「金光教晩香坡教会」が開立された。一方、日本へ一時帰国した際に入信した森下は、カナダに戻ってからは日用雑貨の商売で各家庭を回りながら、主に漁師の夫人たちへの布教活動を行った。やがて、同地に在住する日系人漁民家庭の多くが信仰を始め、定期的に信者宅で祭典をつとめるようになった。

## カナダ社会への「同化」

日系移民の定住の傾向が強まっていくと、ホスト社会への「同化」が大きな課題となっていった。日系キリスト教会は現地社会で生き抜くために様々な側面で日系人をサポートし、彼らが最終的に現地の言葉、風俗、習慣を学んで、白人社会に「同化」していく方向を志向していた。一方、日系人が仏教会に求めたものは、葬儀などの儀式に加えて、日本語教育、日本的道徳の普及であり、当初はキリスト教会のサポートによって形成された日系移民社会での生活において、仏教は日本的側面を提供することになった。

第一次世界大戦を経て日本の東アジアへの進出が拡大される中で、日本とカナダの関係が徐々に悪化していった。BC州においても、漁業、鉱山など様々な分野での日系人のライセンスの削減や就労制限が強化され、排日運動が激化するにつれて、日系人たちの心が日本へと向かうようになった。そのような中で「日本精神」や「大和魂」を教えるものとしての仏教の重要性が増していった。しかし、日本精神をもつこととカナダ市民として生きていくことは、日系人たちのなかで矛盾するものではなく、「むしろ、『忠実な』カナダ市民になるためには、自分は日本人の代表であるとの自負心を持つことが必要である」(飯野、14頁)と考えていた。

## [主な参考文献]

飯野正子『『雄叫び』と『佛陀』にみられる日系人の意識—B.C.州の日系カナダ人コミュニティと仏教会—『経営学論集』Vol.43 No.1、2003年6月。  
金光清治「北米日本人移民の信仰と生活世界」『金光教学』37、金光教教学研究所、1997年。  
佐々木敏二「カナダの日本人移民社会とキリスト教会」同志社大学人文科学研究所編『北米日本人キリスト教運動史』PMC出版、1991年。